CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

新見公立短期大学紀要　第29巻
pp. 51－58, 2008

原著

「健康教室」に関する学内演習と地域看護学実習での学生の学びと学習の成果

栗本　一美[1)]*・掛屋　純子

1）看護学科

（2008年11月12日受理）

現在の社会では、生活様式の変化に伴って引き起こされた生活習慣病を予防することが大きな課題となり、個人が生活習慣を改善するための行動変容が求められ、そのきっかけのひとつの手段として「健康教室」などが地域保健従事者には求められてきている。

これらの背景を踏まえ、看護２年次の授業で学生同士による健康教室演習を体験させ、看護３年次の実習では地域住民を対象に住民の健康問題を踏まえた「健康教室」を実施させている。そこで、看護２年次に行う「健康教室演習」が看護３年次の地域看護学実習中に行う健康教室実習にどのように反映されているのか。また健康教室実習での学びを明らかにすることを目的とした。その結果、演習と実習の評価得点ついては「対象者の反応が確認できた」、「時間配分の適切さ」、「参加者の安全の確保」に有意な差がみられた。また、健康教室実習では「健康教室の意義」や「指導の難しさ」などについての学びが明らかになった。今後、演習と実習を連動させることにより、学生が効果的な健康教室の実践が出来るような教育的指導の必要性が示唆された。

（キーワード）健康教室演習、健康教室実習、学生の学び

はじめに

現在、生活様式の変化に伴って引き起こされた生活習慣病が大きな社会的課題となっている。そこで、2000年にヘルスプロモーションの考え方に基づき健康日本21が開始された。健康日本21は、健康づくりや疾病予防に重点を置くために、栄養改善も含めた国民の健康増進を図り、国民の健康保健の向上を目的とした「健康増進法」の制定へとつながった。そして健康増進法により、個人が生活習慣を改善するための行動変容が求められるようになった。健康教室は、その個人の健康行動の変容の機会になるひとつの手段として考えられ、地域保健従事者には求められてきている。

また看護教育のあり方に関する検討会[1)]にて、看護実践能力の育成について検討が行われ、看護実践能力の育成には、臨地実習の教育形態が重要な意味を持つと報告されている。

そこで、これらの社会背景を踏まえ地域看護学実習では、学生が地域住民を対象とし、住民の健康と生活問題を捉えたうえで、健康教室を実施している。この健康教室の実習は、看護職として対象者にどのような方法で指導を行えば、対象者が自らの健康問題を改善するための行動変容につながるか、指導方法や指導の必要性を理解することを目的としている。今回、学生は健康教室実習をする前に学内で健康教室の演習を体験するその学びが、実習にどのように活かされているのか、また健康教室を実際に行うことによる学生の学びを検討し、教育上の課題を明らかにすることとした。

Ⅰ．研究目的

看護２年次に地域看護学Ⅱ（演習）において実施した健康教室演習の学びが、看護３年次の地域看護学実習中に実施した健康教室にどのように活かされ、どのように学生の学びに繋がっているかを検討し、今後の教育上の課題を明らかにする。

Ⅱ．研究方法

１．**調査対象**：Ａ短期大学３年課程の2006年度看護学科２年次生58名と2007年度看護学科３年次生58名

２．**調査期間**：第１段階調査　2006年12月
第２段階調査　2007年２月

*連絡先：栗本一美　看護学科　新見公立短期大学　718-8585　新見市西方1263-2

3．調査方法：2006年度看護学科2年次生58名の２年次の「健康教室」学内演習の学びと2007年度看護学科3年次の「健康教室」実習の学びについて縦断的調査を実施。

第一段階調査：看護２年次に学内で実施する健康教室演習後に４択式の評価表を配布し、自己評価した後回収した。

第２段階調査：看護３年次に全領域の看護学実習終了後、４択式と自由記述法が記載された評価表を配布し、自己評価をした後回収した。

評価表は、「参加者の関心度」、「参加者の理解度」、「参加者の安全の確保」、「健康教室の設定」など10項目を「大変そう思う」「まあまあ思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の４択式と「健康教室演習の役立ち」、「健康教室を実施後の学び」を自由記述法とし、４択式と自由記述法を併用した自記式評価表を作成した。

4．分析方法

演習終了後と実習終了後に回収した評価表をデータとして取り扱い、２群間の差にはｔ検定を用いた。また、自由記述の内容については項目ごとに意味内容の類似性により分類し、研究者間で検討を重ね分析した。統計処理には、SPSS 15.0 j for windowsを使用した。

Ⅲ．倫理的配慮

各学年ともに研究の目的と方法、匿名性の保持、またこの研究は成績とは無関係であり今後の地域看護学Ⅱの健康教室演習と地域看護学実習中に実施する健康教室に反映していくことを口頭と書面にて説明し、回収をもって了解を得た。

Ⅳ．『健康教室』演習と『健康教室』実習の概要

1．看護２年次に実施する『健康教室』演習の目的と概要

1）健康教室演習目的

地域看護の対象の健康問題について考え、対象が自己の健康をコントロールし、改善することを可能にするための指導方法について理解する。

2）目標

1．地域における対象の特性に応じたテーマを選定することが出来る。
2．健康教室の意義を理解し、効果的に展開するための指導案の作成や効果的な教材を選ぶことが出来る。
3．対象者が興味・関心を持ち主体的に健康問題の改善に取り組むことが出来るような働きかけを学ぶ。
4．健康教室、実施後の評価・修正することが出来る。

3）健康教室の概要

看護2年次生の後期に実施している地域看護学Ⅱ（演習）の中で、「健康教育・教室」についての講義を2コマ実施している。その中で、学生に健康教育・教室の目的や指導方法、指導案の作成方法について教授している。

今回の「健康教室」演習は、その講義終了後にオリエンテーションを行い、準備を含む計3コマの演習を実施した。「健康教室」を受ける対象者として、あらかじめ「車椅子利用の高齢者」「視覚障害のある高齢者」「片麻痺のある高齢者」「呼吸器不全障害のある高齢者」「指先の機能が低下している高齢者」「虚弱高齢者」の5つの条件を設定した。

学生は、講義の内容を踏まえて、一人ひとりが30分程度の健康教室のテーマと内容を計画する。その後、１グループ6～7人程度の10グループに編成し、各自が計画した健康教室の指導案を各グループに持ち寄った。さらに持ち寄った指導案を基に、健康教室のテーマと内容を検討し、1グループにつき10分程度の健康教室が実施[2]出来るように、指導案を再編した。

2．３年次で実施する『健康教室』実習の目的と目標

1）健康教習実習目的

地域看護の対象である個人と家族の健康問題や地域が抱えている健康問題を把握し、対象者の健康問題に対して健康教室を実施し、問題解決に向けた地域看護活動の実際と看護職の役割を理解する。

2）目標

1．個人・集団に合わせた指導方法を理解する。
2．個人・集団の健康状態が理解できる。
3．個人・集団に対しての健康問題に対して看護目標もが立案できる。
4．個人・集団に対しての健康問題が日常生活に及ぼす影響を考え、生活に視点を当てた具体的な援助計画を考えることができる。
5．看護職として予防活動の実際と役割が理解できる。

3）健康教室実習の概要

学生は、２週間の地域看護学実習中に、2人１組で30分程度の健康教室を、診療所の待合室または、サテライト・デイ[3]時に、その地域に住む住民を対象に1ないし2回実施する。学生は、学内で事前にその地域の特性を調べ、健康教室の計画書を立案する。その後、教員に計画書をもとに指導内容を説明し指導を受け、計画書の修正を行う。修正後計画書をもとに学生同士で練習しておくように説明している。健康教室のテーマや内容に関しては自由とし、健康教室を実施する地域の特性を考慮し、そこに住む住民の健康問題に即したものを企画する。また、使用教材等に関しても、学生たちが企画した健康教室が効果的になるように自分たちで考え教材を選ぶようにしている。健康教室当日、対象者の人数に合わせて個人指導と集団指導のどちらが有効的かを、学生を主体と

して判断させ健康教室の実施に至る。健康教室実施後、教員とミーティングを行い、健康教室の反省や学びを深めている。

V．結果

1．看護2年次の演習で行った「健康教室」の評価と学び

1）健康教室演習のテーマと内容について（表1）

調査対象58名中、回答のあった者は58名であった（回収率100%）。

演習中に学生が企画したテーマと内容は、表1に示すごとく、それぞれの対象に合わせたテーマと内容で指導がなされた。テーマに関しては、ただ単に疾患名を挙げたテーマとはせず、「呼吸力アップで生き生き健康生活」、「転ばないで健やか毎日」、「脳の老化を防ぎましょう！」などのように対象が興味、関心を持つことが出来るようなテーマ選定が出来ていた。

また健康教室を実施するために用いられた教材は、10グループ中1グループのみが模造紙を利用し、他のグループはパンフレットを用いて実施していた。

表1　健康教室演習で企画したテーマ

課題	グループ	健康教室テーマ	教材
①車椅子利用の高齢者	1グループ 2グループ	いつでも関節を柔らかくするために「イキイキ体操」 運動不足による肩こり解消	パンフレット パンフレット
②視覚障害のある高齢者	3グループ 4グループ	「転ばないで健やか毎日」 視覚障害者を対象とした在宅での危機回避ポイン	パンフレット パンフレット
③片麻痺がある高齢者	5グループ 6グループ	関節痛の予防 転倒予防のための筋力強化	模造紙 パンフレット
④呼吸機能不全障害がある高齢者	7グループ	呼吸力アップでいきいき生活	パンフレット
⑤指先の機能が低下している高齢者	8グループ	指先運動で脳の活性化 ～認知症予防について～	パンフレット
⑥虚弱高齢者	9グループ 10グループ	脳の老化を防ぎましょう! 物忘れについて	パンフレット パンフレット

2）評価得点について（図1）

「参加者の関心度」、「参加者の理解度」、「参加者の安全の確保」、「健康教室の設定」など11項目を「4:大変そう思う」「3:まあまあ思う」「2:あまりそう思わない」「1:全くそう思わない」の4択式の評価表の平均結果は、図1に示すごとく、「チームワークの大切さ」が3.1、「目標達成ができた」が3.0、「効果的教材の使用ができた」が3.0と「まあまあ思う」の評価であった。次に、「声の大きさ」が2.9、「対象者の反応が確認できた」、「対象者の関心度は高かった」、「対象者の理解度」、「健康教室の設定の適切さ」が2.8であった。次に、「対象者の安全の確保」、「時間配分の適切さ」が2.7の順であった。

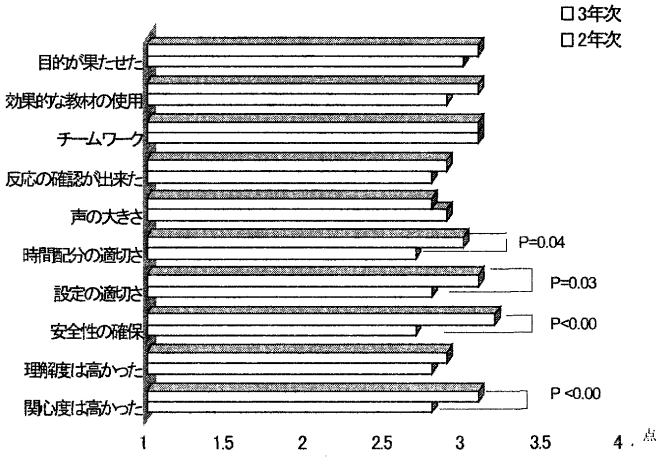

図1　健康教室演習と実習の評価得点の変化

3）演習後の学び（表2）

自記式質問用紙の記述内容からを類以性にそって分類した結果、6つのカテゴリーと8つのサブカテゴリーが抽出できた。カテゴリーを【】で示し、サブカテゴリーを『』で、コードを<>で示す。

【対象者参加型の健康教室】では『説明の工夫の必要性』『対象者にあった方法』『参加型の健康教室の実施』のサブカテゴリーが抽出され、<専門用語を用いた説明はわかりにくい><健康教育にもっと対象者が参加出来る内容で行えるようにしたい><どのようにすれば相手にとってわかりやすく伝わるか対象に合ったやり方を考えなければならないことを学んだ>などであった。

【健康教室の運営方法の理解】については、『運営方法の理解』のサブカテゴリーが抽出され、<健康教室をスムーズに行うためにはしっかり計画を立てて練習しておくことが大切><教育をするので知識もたくさん必要><実際耳栓をしていると、マイクを使用してちょうど良い声の大きさ>などであった。

【対象者の反応を捉える必要性】では『対象者の反応の確認』のサブカテゴリーが抽出され、<どのくらい理解したか聞けばよかった><自分たちのことで精一杯になってしまい、主役であるはずの高齢者の反応を確かめることが出来なかった><対象者の反応を見ていなかった><自分たちが説明することに必死になり、対象者の反応や理解度を確認できなった>などであった。

【教材の工夫の必要性】では『教材の工夫』のサブカテゴリーが抽出され、<パンフレットのみで進めていったので模造紙などを使ってもう少し見えやすくすればよかった><パンフレットを作ったのだけれどポスターも書いたらさらにわかりやすくできたと思う><絵を使ったりカラフルにしたりして工夫すればより良かった>など対象に内容を伝えるための具体的な方法についての学びが表現されていた。

表2　健康教室演習の学生の学び（n=58）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
対象者参加型の健康教室（34）	説明の工夫の必要性　（19）	・説明が足りない部分もあり、大きな声で分かりやすい説明が必要 ・専門用語を用いた説明はわかりにくい
	対象者にあった方法　（12）	・水を入れたペットボトルをダンベルとして用いたが片麻痺の方には難しい ・耳栓をしているため大きな声で説明する必要があった
	参加型の健康教室の実施　（3）	・健康教育にもっと対象者が参加出来る内容で行えるようにしたい ・私たちは説明することが多く、もっと参加型の健康教室にしたらよかった ・どのようにすれば相手にとってわかりやすく伝わるか対象に合ったやり方を考えなければならないことを学んだ
対象者の反応を捉える必要性　（30）	対象者の反応の確認　（30）	・どのくらい理解したか聞けばよかった ・自分たちのことで精一杯になってしまい、主役である高齢者の反応を確かめることが出来なかった ・対象者の反応を見ていなかった
教材の工夫の必要性（21）	教材の工夫　（21）	・パンフレットのみで進めていったので模造紙などを使ってもう少し見えやすくすればよかった ・パンフレットを作ったがポスターも書いたほうがわかりやすかった ・絵を使ったりカラフルにしたりして工夫すればよりよいなぁと思った
健康教室の運営方法の理解　（10）	運営方法の理解　（10）	・健康教室をスムーズに行うためにはしっかり計画を立てて練習しておくことが大切 ・本当に打ち合わせが大切だし教育をするので知識も沢山必要 ・実際耳栓をしていると、マイクを使用してちょうど良い声の大きさ
対象者の安全確保　（7）	安全確保の必要性　（7）	・視覚障害のある高齢者に対して、十分対応したつもりだったが聴覚に対しての対応が不十分だった ・途中で手順を間違え、参加者の方に余計な動作をさせてしまった ・対象者側について介助したのは良かったが、移動の際もっと声かけができたらよかった
チームワークの大切さ（3）	チームワークの大切さ　（3）	・チームワークを確立してきちんと勉強して取り組んでいくべき ・チームワークがよかったので、物品の使用や介助ができた。

【対象者の安全確保】では『安全確保の必要性』のサブカテゴリーが抽出され、<視覚障害のある高齢者に対して、十分対応したつもりだったが聴覚に対しての対応が不十分だった><途中で手順を間違え、参加者の方に余計な動作をさせてしまった><対象者の側について介助したのは良かったが、移動の際もっと声かけができたらよかった>などであった。

【チームワークの大切さ】では、『チームワークの大切さ』のサブカテゴリーが抽出され、<チームワークを確立して自分たちもきちんと勉強して取り組んでいくべき><チームワークが良かったので、物品の使用、介助は思うようにできた>などがあった。

2．3年次の実習中に行った「健康教室」の評価と学び

1）実習中のテーマと健康教室の内容（表3）

調査対象58名中、回答があった者は48名であった（回収率82.7%）。

2週間の地域看護学実習中に学生が実習中に実施した健康教室は、診療所とサテライト・デイを合わせて全体で92回実施し、全員が平均1回は健康教室を体験していた。テーマと内容については、高齢者に起こりやすい「骨訴鬆症」「認知症について」「誤嚥予防」や季節や時期によって起こりやすい「熱中症について」「脱水予防」、社会背景によっての「介護保険制度について」「食事バランスについて」であった。教材については、ほとんどの学生がパンフレットを使用しており、数名が模造紙とパワーポイントを使用していた。

表3　健康教室実習で企画したテーマ

健康教室テーマ	教材	健康教室テーマ	教材
つぼマッサージと疲労回復	パンフレット	熱中症予防	パンフレット
腰痛について	パンフレット	誤嚥予防	パンフレット
食品の表示	パンフレット	夏ばて予防	パンフレット
歯ブラシ指導	パンフレット	糖尿病について	パンフレット
高血圧	パンフレット	介護保険について	パンフレット
骨粗しょう症	パンフレット	かゆみについて	パンフレット
腰痛体操	パンフレット	お風呂の入り方	パンフレット
脱水の予防について	パンフレット	食中毒について	パンフレット
関節予防	模造紙	脳の活性について	パンフレット
転倒予防	パンフレット パワーポイント	カルシウムとビタミンDについて	パンフレット

2）実習で実施した評価得点について（図1）

評価表に記載しているそれぞれの項目の評価得点の平均は、得点が高い順に「参加者の安全の確保」が3.2、「健康教室の設定の適切さ」と「参加者の関心度」、「目標達成ができた」が3.1、「時間配分の適切さ」と「チームワーク」、「効果的な教材の使用ができた」が3.0、「参加者の理解度」と「対象者の反応が確認できた」が2.9、「声の大きさ」が2.8であった。さらに「演習の役立ち」については3.3であった。

3）自由記述による学生の学び（表4）

自記式質問用紙の記述内容からを類以性にそって分類した結果、8つのカテゴリーと12のサブカテゴリーが抽出できた。カテゴリーを【】で示し、サブカテゴリーを『』で、コードを<>で示す。

【指導の難しさ】、『指導の難しさ』では<相手に教えていくことは難しい>＜計画を考えることの難しい>＜どの教材を利用すると効果的にできるのかを考えるのが難しかった>などであった。

【健康教室の意義】では、『継続指導の大切さ』『健康指導の意義』のサブカテゴリーが上がり、＜継続して行うことの大切さを学んだ>＜参加者が持っている価値観や健康観はすぐには変更できないことがわかった>＜予防が第一>＜指導が健康意識の高まりにつながる>＜個人から家族に広がり家族全員の健康の維持につながる>などがあった。

【学生の自信】、『学生の自身』では、＜相手の理解度やその人に合わせて話すことが出来るようになった>＜伝わったときの喜びを感じた>＜人前でする楽しさを感じた>＜プレゼンテーション能力が身についた>などであった。

【対象に合わせた方法で実施】、『対象に合わせた方法で実施』では、＜対象者に合った内容を考えることが大切>＜もっと相手のことを考えるべきだと思った>＜対象者の目線を考えながら進めていくこと>などであった。

【対象者の反応を捉える必要性】では、『反応を見ながら進める』、『会話のキャッチボール』、『相互作用』のサブカテゴリーが上がり、＜直接対象者の声や反応があり、対象者の理解にそって行うことを学んだ>＜相手の反応を確認する>＜会話のキャッチボールができるように進めていくことが大事>＜参加者から意見を聞くことで自分達も新たな発見があった>＜健康教室は、逆に教えてもらうこともありお互いが学ぶ場>などであった。

【十分な学習の必要性】では、『知識を身につけておく必要性』、『正確な情報提供の大切さ』のサブカテゴリーが上がり、＜自分自身がしっかり勉強していないときちんとした知識の提供は難しい>＜質問された時に答えられるくらい勉強しないと説得力がなくなると思った>＜誤った知識を持っている人もいたので、正確な情報を相手が分かるように説明しないといけないと思った>などであった。

【人と触れ合う大切さ】、『人との触れあう大切さ』では、＜対象者との交流が深まることが出来た>＜地域の方と触れ合うことが出来た>などであった。

【対象の背景を理解する】では、『地域性や対象者の生活を知る』のサブカテゴリーが上がり、＜参加者の問題点や生活について興味を持ち、行うことの大切さを学んだ>＜地域の特徴をつかむべきだと思った>などであった。

表4　健康教室実習での学び（n=48）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
指導の難しさ　(9)	指導の難しさ　(9)	・相手に教えていくことは難しい。 ・計画を考えることの難しい。 ・どの教材を利用すると効果的にできるのかを考えるのが難しかった
健康教室の意義　(8)	継続指導の大切さ　(2)	・継続して行うことの大切さを学んだ。 ・参加者が持っている価値観や健康観はすぐには変更できないことがわかった。
	健康指導の意義　(6)	・予防が第一 ・指導が健康意識の高まりにつながる。 ・個人から家族に広がり家族全員の健康の維持につながる。
学生自信の自信　(8)	学生自信の自信　(8)	・相手の理解度やその人に合わせて話すことが出来るようになった。 ・伝わったときの喜びを感じた ・人前でする楽しさを感じた。 ・プレゼンテーション能力が身についた。
対象に合わせた方法で実施　(8)	対象に合わせた方法で実施　(8)	・対象者に合った内容を考えることが大切。 ・もっと相手のことを考えるべきだと思った。 ・対象者の目線を考えながら進めていくこと
対象の反応を捉える必要性（7）	相手の反応を見ながら進める　(4)	・直接対象者の声や反応があり、対象者の理解にそって行うことを学んだ ・相手の反応を確認する
	会話のキャッチボール　(1)	・会話のキャッチボールができるように進めていくことが大事
	相互作用　(2)	・参加者から意見を行くことで自分達も新たな発見があった。 ・健康教室は、逆に教えてもらうこともあるのでお互いが学ぶ場だと思った。
十分な学習の必要性(6)	知識を身につけておく必要性　(5)	・自分自身がしっかり勉強していないときちんとした知識の提供は難しい ・質問された時に答えられるくらい勉強しないと説得力がなくなると思った
	正確な情報提供の大切さ　(1)	・誤った知識を持っている人もいたので、正確な情報を相手が分かるように説明しないといけないと思った。
人と触れ合う大切さ（4）	人と触れ合う大切さ　(4)	・対象者との交流が深まることが出来た。 ・地域の方と触れ合うことが出来た。
対象の背景を理解する（3）	地域性や対象者の生活を知る　(3)	・参加者の問題点や生活についてなどの興味を持ち行うことの大切さを学んだ。 ・地域の特徴をつかむべきだと思った。

3．健康教室演習と健康教室実習との違いについて

看護2年次58名と看護3年次48名の評価得点の差についてみると、評価表に記載しているそれぞれの評価得点の平均得点は図1に示す如く、「対象者の関心度が高かった」(P<0.00)、「参加者の安全の確保」(P<0.00)、「健康教室の設定の適切さ」(P=0.03)、「時間配分の適切さ」(P=0.04) の4項目に有意に差が見られた。しかし、それ以外の項目については有意な差は認められなかった。

Ⅵ．考察

1．健康教室演習と健康教室実習における学生の学びの違い

1）2年次の演習と3年次の実習の評価得点と学びについて（図1）

看護2年次58名と看護3年次48名の評価得点の差についてみると、評価表に記載している10項目中、「健康教室の設定の適切さ」、「時間配分の適切さ」、「参加者の安全の確保」、「対象者の関心度が高かった」の4項目に有意に差がみられた。

有意な差がみられた項目について、学びのカテゴリーと合わせて考えると「健康教室の設定の適切さ」の項目に関しては、2年次の学内演習時のカテゴリーには、【健康教室の運営方法の理解】が抽出され、<健康教室をスムーズに行うためにはしっかり計画を立てて練習しておくことが大切>と学んでいた。しかし、3年次の実習のカテゴリーでは、健康教室の運営方法に関してのカテゴリーは抽出されず、<継続して行うことの大切さを学んだ>などから『継続指導の大切さ』や<指導が健康意識の高まりにつながる>など『健康指導の意義』など【健康教室の意義】のカテゴリーが抽出されている。さらに、「参加者の安全の確保」の項目に関しても、学内演習のカテゴリーには、<対象者の側について介助したのは良かったが、移動の際もっと声かけができたらよかった>などから【対象者の安全確保】のカテゴリーが抽出されていたが、実習では対象者の安全の確保に関してのカテゴリーは抽出されていなかった。このことは、「演習の役立ち」の項目が、「まあまあ思う」の評価であり、学内演習が1年後の実習にまあまあ役立っていたことを示していたことからも、学生が実習で行う健康教室は、学内演習で学んだ対象者の安全性を踏まえながら健康教室の運営を行ない、さらに、自分達が実施した【健康教室の意義】につなげて学びを深めることが出来ていると推測される。

一方、「対象者の理解度の高さ」や「声の大きさ」、「対象者の反応の確認できたか」、「チームワーク」、「目標達成」、「効果的な教材の使用」の6項目については有意な差がみられなかった。しかし、「チームワーク」、「目標達成」、「効果的な教材の使用」の項目に関しては、学内演習、実習ともに評価平均が「まあまあそう思う」の肯定的評価であったため、学びの定着が推測できる。だか、「声の大きさ」に関しては、学内演習の評価平均は「あまりそう思わない」であり、対象者に適した声の大きさではなかったと否定的な評価であったにもかかわらず、実習でも対象者に適した声の大きさではなかったと否定的な評価であった。このことは、学内演習時の対象者は、学生が耳栓をして高齢者役に臨んでいたが、実際の高齢者の耳の機能とはやはり異なっていたことや実習中に出会う高齢者、個々によって聞こえ方が違い、大きな声で話していたつもりでも聞こえていなかったことを体験し、その結果、実習でも「声の大きさ」に関しては、学内演習時の否定的な評価のままになったと考えられる。最近では、模擬患者（SP:Simulated Patient）を演習に使用して演習を展開しているところも少なくない[4]。模擬患者を利用して演習を展開することで、演習はより臨場感が高まり実習との差がなく学習ができると思われる。今後、演習方法についても検討していく必要がある。

2）3年次の健康教室実習での学びについて

自由記述による学びについてみると、8つのカテゴリーと12のサブカテゴリーが抽出できた。演習の目的は、健康教室の指導の仕方を理解することを挙げているため、2年次の演習でのカテゴリーは、【対象者参加型の健康教室】や【教材の工夫の必要性】、【健康教室の運営の方法の理解】、【対象者の安全確保】など健康教室の運営の仕方に着目したカテゴリーが抽出されている。しかし、3年次の実習では、【指導の難しさ】や【健康教室の意義】、【対象に合わせた方法での実施】、【対象の反応を捉える必要性】、【十分な学習の必要性】、【人と触れ合う大切さ】、【対象の背景を理解する】など運営の仕方からより進み、より効果的な実践方法に着目したカテゴリーが抽出されている。演習と実習の目的の違いから抽出されるカテゴリーの違いはあるが、より学生は視野を広げて考えることができていると思われる。特に、<会話のキャッチボールができるように進めていくことが大事>の『会話のキャッチボール』や<健康教室は、逆に教えてもらうこともあるのでお互いが学ぶ場だと思った>『相互作用』からの【対象者の反応を捉える必要性】は、実際に高齢者との関わりでなければ学ぶことができない。また、<参加者の問題点や生活についてなどの興味を持ち行うことの大切さを学んだ>、<地域の特徴をつかむべきだと思った>『地域性や対象者の生活を知る』【対象者の背景を理解する】では、対象者が住んでいる地域に出向き、学生が対象者の生活圏域で実際に行うことによりその地域性を肌で感じて学べることである。机上では学べない隣地実習の効果とも言えよう。古田ら[5]も保健師課程の学生に実施した健康教室の学びの結果から同様の意見を述べている。

また、学生は健康教室の実施を通して<相手の理解度や

その人に合わせて話すことが出来るようになった><伝わったときの喜びを感じた><プレゼンテーション能力が身についた><人前でする楽しさを感じた>などから【学生自信の自信】のカテゴリーが抽出され、学生は肯定的感情を抱いていたことが伺える。健康教室の実施に至るまでに、数回教員とのやり取りを繰り返し、時間とエネルギーを費やし健康教室を実施する結果と考えられる。この結果は、角田ら[6]が健康教育の実施は、達成感が高く、実りの多い実習と報告しているのと同様と考える。また、学生は健康教室の実習を体験し、【指導の難しさ】のカテゴリーも抽出された。このように、今回の経験を通して学生は指導する難しさも痛感しているが、教員や指導者から指導を受けながらも自ら実践できる基礎的技術の習得は出来ていると考え、健康教室の実習は実践能力を高めるための有効な機会であると考える。

Ⅶ. 今後の課題

今回、演習と実習の学びの差や繋がりなどを明らかにすることができた。

臨床の場では、健康教室や健康教育のように対象者に指導していく場面は多く存在し、将来学生も指導する立場に立つ可能性は大いにある。その場合、看護職のメッセージを対象者にただ伝えていくトップダウン型ではなく、対象者が主体的にその課題に取り組むことが出来るように、学習を組み立て、指導方法を考えていくことが必要となってくる。そこで、演習で指導の基礎的な方法を身につけ、実習でより効果的な指導が実施できるように臨床と演習の乖離がない演習方法の検討が明らかとなった。また、今回学生の学びとしてあがることはなかったが、指導効果をあげるのに有効である「グループダイナミックス」の視点を健康教室実習に加えるなど、より学びの広がりと学びの定着が出来るような実習指導方法を検討する必要があると考える。

引用文献

1) 文部科学省：大学における看護実践能力の育成の充実にむけて,看護学教育のあり方に関する検討会報告，2002

2) 栗本一美・掛屋純子：「健康教室」演習を取り入れた教育効果～学生の自己・他者評価を分析して～,新見公立短期大学紀要,28,93-99,2007

3) 栗本一美・木下香織・古城幸子：在宅高齢者を対象としたサテライト・デイの運営評価, 新見公立短期大学紀要、26、177-187,2005

4) 奥山真由美・肥後すみ子・荻あや子他：SP導入によるコミュニケーション演習の授業改善がもたらす学習効果，岡山県立大学保健福祉部紀要，vol.14，81-89，2008

5) 古田加代子・佐久間清美・輿水めぐみ他：地域看護学実習における学生の健康教育実施状況と学びの検討，愛知県立看護大学紀要，第12巻，33-40，2006

6) 角田あゆみ・奥山規子・杉本正子他：保健婦学生の健康教育実践の分析,東京都立医療短期大学紀要,9,237-250,1996

7) 小山真理子：新カリキュラムがめざすこと「看護基礎教育の充実に関する検討会」を終えて，看護教育，第47巻，第7号，555-562，2007

栗本　一美・掛屋　純子

The results of learning in students who experienced a "health workshop" in the classroom and in the nursing practice

Kazumi KURIMOTO , Junko KAKEYA

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Abstract

Today, as the prevention of adult diseases attributable to changes in lifestyle has become a major challenge, behavioral modification for individuals to improve their lifestyle is increasingly needed, and community health workers are required to practice such measures as part of a "health workshop" to motivate people to do so.

In this context, we provide second-grade students with an opportunity to experience health workshop practice in the classroom, and third-grade students conduct health workshops with residents in the community in view of their health problems. Thus, this study was conducted to clarify how the classroom practice was reflected in the health workshop during nursing practice, and what students learned from the health workshop in the nursing practice. The results revealed that evaluation scores for the classroom practice and the nursing practice significantly differed in the items "the audience's responses were clear," "appropriateness of time allocation," and "securing of participants' safety." It was also demonstrated that students had learned the "significance of the health workshop" as well as the "difficulty to instruct" in the health workshop in the nursing practice. These findings suggest the necessity of relating the classroom practice with nursing practice to provide educational guidance that enables students to conduct effective health workshops.

Key words: health workshop practice in the classroom, health workshop training in nursing practice, students' learning